

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 4 2	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
The stability and reliability of self-reported drinking measures. 自己報告による飲酒に関する調査の安定性と信頼性	
執筆者	
Gruenewald PJ, Johnson FW.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Journal of studies on alcohol.2006 Sep;67(5):738-45	
キーワード	
自己報告式飲酒調査、確実性、安定性	
<p><b>要 旨</b></p> <p>目的： 飲酒に関する状況を調査する場合、自己報告式反復調査法の信頼性は、回答者が実際の飲酒習慣とどの程度一致して回答するか（確実性）ということと、回答内容が調査毎にどの程度一致しているか（安定性）により影響を受ける。飲酒パターンが不安定であると、調査は確実かもしれないが、安定性を保てない。本研究では飲酒パターンの安定性が飲酒に関する自己報告式反復調査法の信頼性と関連するかどうかを検討した。</p> <p>方法： 今回の検討は、307人の一般住民の中の飲酒者を対象として、1ヶ月の間隔をあけて2回実施した電話調査の結果を使用している。飲酒に関する調査の内容は飲酒開始年齢と、飲酒回数、1回の平均飲酒量、総飲酒量である。飲酒の安定性については飲酒パターンの解析方法としてよく知られたモデルを使用して評価した（すなわち飲酒量と頻度の分散を用いた）。飲酒状況の異なったグループについて飲酒調査の安定性と確実性を分析した。</p> <p>結果： 全般に反復調査法の確実性は良好であった。その範囲は飲酒量が最も低く 0.65 で、飲酒頻度が最も高く 0.85 であった。飲酒量調査の安定性は信頼性に大きな影響を与えた。安定した飲酒パターンを持つ者では反復調査の信頼性が非常に高かった。</p> <p>まとめ： 電話調査による一般住民に対するアルコール使用に関するデータはかなり信頼性が高い。しかし、この信頼性は安定した飲酒パターンにも依存している。一見不確実である自己報告式飲酒は実はかなり信頼できるのであるが、不安定な飲酒パターンによって信頼性が損なわれているのかもしれない。</p>	